

## 世界一安全な輸血療法をこの広島に実現することを願って

日本の輸血の安全性は世界一です。それは医療で必要とされる血液が確保され、安全な輸血療法を実施する輸血システム並びに関係者の知識と技術の向上努力によって支えられてきました。しかし、そのシステムは決して目新しいものではありませんし、完全無欠でもありません。安全な輸血を行うその瞬間には、様々な危険性が隠れており、そのことは、医療安全管理の面でも大きく取り上げられ、指摘されているところです。

今年度は、世界一安全な輸血医療の主役の一人である看護師にスポットを当て、その資質向上を目標としました。具体的な取り組みとしては、委員会を構成する16医療機関から「輸血療法におけるヒヤリ・ハット事例」を収集し、医療現場に還元する事業を実施しました。委員会です承を得たのち、全部で96件の「ヒヤリ・ハット事例」を御提供いただきましたので、それを分析し、研修会で報告しました。

今後も、輸血に携わっていただく看護師の教育にも継続して取り組んでいき、ひいては安全な輸血をこの広島でより一層広めていきたいと考えております。

また、研修会では、「輸血前後の感染症検査」に関する取組として昨年度作成した「輸血手帳ひろしま」の活用事例について、県内の3医療機関から発表していただきました。「輸血前後の感染症検査」については、一昨年度から取り組んでいますが、様々な課題が指摘されております。各医療機関において積極的に実施していただくためのツールとして「輸血手帳ひろしま」の改訂についても、必要に応じて検討していきたいと考えております。

さらに、東京医科大学八王子医療センターの田中朝志先生に「数字で見る日本の輸血医療の実態」と題して御講演いただきました。看護師の参加が増え、過去最高の237人の参加者があり、輸血医療に従事する方それぞれにとって有益な研修となったと思います。

本報告書の作成にあたり、調査や執筆に当たっていただいた諸先生方、様々な事務を担ってくださった広島県薬務課と血液センターのスタッフの皆様にご礼を申し上げます。

2017年3月

広島県合同輸血療法委員会

藤井 輝久（広島大学病院 輸血部長）